

第21回関西学院史研究月例会 (二〇〇七・七・三)

演題 関西学院とYMCA

講演 中道 基夫

司会 永田雄次郎

永田 第二一回関西学院史研究月例会を開きたいと思
います。本日は皆様お集まりくださいまして感謝いたします。
どうもありがとうございます。

本日は、「関西学院とYMCA」という題で神学部の准
教授でいらっしゃいます中道基夫先生にお話していただ
こうと思います。中道先生については皆さまもすでにご存
じだと思えます。先生は、関西学院大学のご出身で、実践神学、
宣教学、説教学をご専門にされております。先生が書かれ
ておられますのを読みあげますと、「外国から伝えられた
キリスト教礼拝式文、特に葬儀式文、結婚式文が日本の中
でどのように変化し、その変化が日本における宣教にとつ
てどのような意味があるかを」研究されているとあります。
先生はドイツの教会でお働きなされた経験をもとに、本年四

月に『現代ドイツ教会事情』を出版されました。それでは、
中道先生よろしくお願いいたします。

はじめに

ご紹介いただきました神学部の中道基夫と申します。私
は明石出身で、一九八四（昭和五九）年に神学部を卒業い
たしました。卒業後は、神戸栄光教会で三年間伝道師とし
て、福井の城之橋教会で六年間牧師として勤めました。そ
の後、日本基督教団から派遣されて、ドイツのヴュルテン
ベルク州教会で協力牧師として働きました。二〇〇〇（平
成一一）年から関西学院の神学部で働いております。

「関西学院とYMCA」というテーマをいただきました。

私が今神戸YMCAの理事をしており、後でお話をいたしますが、関西学院の学生YMCAの顧問もしておりますので、その関係でこのテーマが与えられたのだらうと思っています。この講演のご依頼を受けて、あらためてYMCA運動そのものやYMCAと関西学院との関係について調べさせていただきました。

関西学院に関係したひとりひとりの人物とYMCAとの関係を語ることは、非常に豊かにできるのではないかと思います。ここにいらつしやいます宮田満雄先生も神戸YMCAの理事長をお務めになり、日本YMCA同盟の国際委員会の委員長もお務めになりました。またお父様の宮田守衛氏は、関西学院の普通部高等科のご出身で、神戸YMCAの初代総主事としてお働きになったとうかがっております。また、宮田守衛氏はYMCAを通してバスケットボールを関西に広められ、日本のバスケットボール史上重要な働きをされた方であるとおうかがいしております。また「High School YMCA」という高校生のYMCAがありまして、その第一回の全国大会で初代委員長に選ばれたのが山内一郎先生でした。ですから、このような関学に関わる多くの人々がYMCAにおいて貢献されてきました。現在も多くの関西学院の卒業生や教職員、もちろん在生も

様々な形でYMCAとかかわっておられます。

しかしながら、関西学院としてYMCAにどのようなかわったか、また関西学院がYMCAの理念であったキリスト教青年伝道というものにどのようなにかかわったかということは、明確な形で申し上げることができません。関西学院史を紐解きましても、「関西学院史とYMCA」というテーマにはほとんど言及されていません。過去の研究の中では、井田昭子さんが『キリスト教主義教育―キリスト教主義教育研究室年報―』のなかで三編ほどYMCAにかかわる論文を書いておられますが、それは教職員のYMCAとの個人的な関係について取り扱われたものであり、関西学院とYMCAとの関係について言及されているものではありません。

おそらく、他のキリスト教主義の学校もYMCAとそれほど深い関係にあるとも言えませんが、特に関西学院がなぜYMCAとあまり大きな関わりがないかというのには、二つの理由が挙げられると思っております。

まず、関西学院を設立した南メソヂスト教会の日本宣教は、同志社を設立したアメリカの教会宣教団体や他のアメリカの宣教団体と比べると若干遅れをとっていたということです。東京YMCAは、一八八〇（明治一三）年に設立

関西学院とYMCA

され、大阪YMCAは一八八二(明治一五)年、神戸YMCAが一八八六(明治一九)年に設立されています。神戸YMCAが設立された一八八六年にW・R・ランバス(Walter Russell Lambuth)先生が、神戸に到着いたしました。神戸YMCAの前身の英語学校が設立された後に、南メソヂスト教会の宣教師団が来て、関西学院が設立されたという経緯があります。

第二の理由は、神戸や大阪のYMCAは主として組合教会によって担われたということです。関西学院は日本メソヂスト教会と関係を持っていたのですが、同志社は日本組合教会との結びつきが強く、この教派の牧師の養成を行っていました。この日本組合教会の教師や教会によって大阪YMCAや神戸YMCAが創立まで導かれていきました。大阪にしろ神戸にしろYMCA活動の発端となったのは、宣教師を中心とする英語学校でした。それぞれのアメリカの教派から送られてきた宣教師は、日本において英語教育を宣教活動とするという手段を採っていました。アメリカの文化や言語、さらにはキリスト教と出会える英語学校は、宣教の場として非常に効果的であったといえます。関西学院を設立したW・R・ランバスも、特に神戸の地においての宣教手段として、パルモア英学院を一八八六(明

治一九)年に来日後すぐに開設いたします。つまり、神戸の地ではメソヂスト系のパルモア英学院と、組合教会系の神戸英語学会(後に神戸YMCAへと発展する)を、二つの教派が同じような時期に設立しました。どれくらいライバル関係にあったかはよくわかりません。そのパルモア英学院は、メソヂスト教会の神戸中央教会、現在の神戸栄光教会によって担われていきます。神戸英語学会、神戸YMCAは、主として組合教会である神戸教会によって担われています。この二つの教会は、神戸のプロテスタントの大きな二つの教会であり、隣接しています。ですから、従来パルモア英学院に関係する人は神戸栄光教会にやってきましたし、YMCAの主事や理事などのYMCA関係者は、比較的神戸教会の人、もしくは同志社に関係する組合教会系の人が多かったということがうかがえます。YMCAと組合教会との強い関係は大阪YMCAにおいてはもつと如実に現れてきます。

それではYMCAの人たちは、関西学院の人を受け入れないとか、神戸栄光教会やメソヂスト教会の人は関係ないといったわけではなくて、やはり、お互いに協力し合っていたわけです。もちろん、特に敵対関係にあったというわけではありません。

関西学院の院主であり、メソヂスト教会のメンバーである中村平三郎氏であるとか西川玉之助氏は、神戸YMCAが教会の中の一団体から市民運動団体化していく一九〇〇年代に、神戸YMCAの中で活躍していくわけですから、別に関西学院がスポイルされていたわけではありません。

では、関西学院とYMCAはそういう個人的な活動だけのかかりであったかという点、そうではありません。YMCAと聞きますと、多くの方がいわゆる都市YMCAといわれる活動を思い浮かべられると思います。しかし、YMCAには、都市YMCAと学生YMCAという二つの活動があります。

このYMCAの基本的な活動のひとつである学生YMCA、基督教青年会というものを通して、YMCAはしっかりと学院史のなかに根付いており、様々な現在の宗教活動の中にもその影響を見出すことができます。後でお話いたしますが、関西学院基督教青年会は、一八八九（明治二二）年九月に学院が設立された二ヶ月後に、既にその活動を開始しています。ですから、学生YMCAというものが、学院の歴史とともに始まっていました。ただ、一九六九（昭和四四）年、その当時はSCAと名乗っていたわけですが、学園紛争の影響で解体されて学生YMCA

自身はなくなってしまうわけです。全国的にいつてもその頃から学生YMCAが衰退の傾向にありました。しかし、一九八〇年代からは、少しずつ全国的に学生YMCAが持ち直してきた時に、関西学院大学でも、学生YMCAが非公認団体ではありましたが再開されます。その後また一時休止状態が続いたのですが、二〇〇一（平成一三）年に再び活動を始め現在に至っています。

現在の活動は、学内では非公認団体で、関西学院の歴史の一ページを位置づけられるかどうかはわかりませんが、創立当初から始められていた基督教青年会活動の歴史を顧みながら、これまでの関西学院の辿ってきた歴史の一面と現在の課題を考えてみたいと思います。

1、信徒運動としてのYMCA運動

YMCAというのは一体何なのかというのは、なかなか一言では説明できません。YMCAは青少年の野外活動やスポーツ施設、英語学校として知られていました。少し前ですと、YMCAは予備校としての存在が大きかったですが、今はもうそのイメージも弱くなってきました。いろいろな面がありますが、本質的には宣教団体であって、キ

関西学院とYMCA

リスト教を述べ伝えるということを目的として全世界に広まっていった団体であります。

一六世紀に日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、カトリック教会のプロの宣教師といいますが、プロの教師、司祭でした。そのプロの司祭が宣教を担っていました。それはカトリック教会が宣教師を送るというひとつの公の活動であつたわけです。しかし、一九世紀から始まる近代の宣教運動では、ヨーロッパのプロテスタント教会は宣教師を送っていないのです。ドイツの教会は宣教師を海外に送らないのです。ドイツの教会で宣教師を送るのは信徒たちなのです。信徒たちが自分たちで任意団体を作って、そして信仰に燃えた人たちが宣教師を派遣するわけです。それがいわゆるミッション・ボードといわれるのです。牧師たちは、所属教会を辞めて宣教師として送られていくわけです。そして宣教活動を終えて帰国しても、その教会には勤められませんでした。

アメリカの教会は少し感じが違つていたと思いますが、根本的には世界宣教は、信徒運動でありました。信徒運動であつたのですが、徐々に教会とか牧師指導型に変わつていくのです。その中でも、唯一大きな信徒団体として、牧師とか教会というものに依存しない団体として世

界に広まっていったのが、YMCAであり、YWCAであり、後に出てきますWSCF (World Student Christian Federation, 世界学生基督教連盟) でありました。

ここで話を中断させていただいて、いまから色々な言葉が出てきます。YMCA (Young Men's Christian Association) は、基督教青年会と訳されます。そのひとつ、大学生を対象とした部門を学生YMCAと呼びます。最初の基督教青年会というのは学生YMCAとほとんど同じですので、その名前が交互に出てきたりいたします。YMCAとは別に、世界のキリスト者の学生的一致といますか連帯というものを求めたのがWSCFという団体です。このWSCFとYMCAは非常に近い関係にありました。ほとんど表裏一体とか混在しているような状況でありますので、はつきりと区別することはできません。このWSCFの各国の運動をSCM (Student Christian Movement) と呼びます。SCMというのは、後で述べますが、同じような名前がSocial Christian Movement という社会的基督教運動というものが、別にあります。これも学生の中に起つてくる運動であるので、この二つのSCMが混合されて使われることがあります。それで各大学で、学生YMCAを名乗っていましたが、共学になったり、ま

YMCA: Young Men's Christian Association 基督教青年会

学生YMCA

WSCF: World Student Christian Federation

S C M: Student Christian Movement

S C M: Social Christian Movement

S C A: Student Christian Association

K G K: Kirisutosha Gakusei Kai

たYWCAとYMCAが一つになって違う名前を作るために、SCA (Student Christian Association) という名称ができません。関西学院でもSCAと名乗っていましたし、同志社大学でも学生YMCAのことをSCAといっております。名前は違いますが実態としてはほぼ同じものです。

余談ですが、学生団体としてはKGKというキリスト教に関わる団体があります。これも関西学院にも関わっています。これは、Kirisutosha Gakusei Kai (キリスト者学生会) の頭文字を取ったものです。こういう言葉が今から出てまいりますので、少し整理しながら聞いていただけたらと思います。

信徒団体としてのYMCAやYWCA、WSCFは、信仰覚醒運動として、キリスト教信仰を個人的な体験として活性化しようとした団体であ

りました。もともと福音的といえますか、キリスト教を世界に広め、個々人を、クリスチャンへ、キリスト教へと導くことを目的とした団体でありました。一八五五(安政二年、最初の世界YMCA大会で採択された「パリ基準」にも「われら世界のYMCAは、イエス・キリストを聖書にしたがってわが神わが救い主と仰ぎ、信仰とその生活において彼の弟子でありたいと願う青年たちを一つとし、イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされるよう、その努力を結集する」と書かれており、極めて伝道というものを意識した団体であることがわかります。

2、日本における学生YMCA

日本の学生YMCAというのは、どういうものであったのか、どこから始まったかといえますと、ご存じの札幌農学校のクラーク博士の周りに集った学生たちが、日本の第一号学生YMCAであるといわれております。その頃は全国的な組織としてのYMCAというものがあって、学生YMCAをつくりましょう、また、都市Yといえますか大阪YMCAや京都YMCAがあつて、大学にYMCAを作りましょうということではなくて、それぞれの大学に宣教師

関西学院とYMCA

が来て、そこに集った青年たちが、青年会として作り上げていったのがYMCAだったので。ですから、その頃はYMCAと学生YMCAは区別がなかったと思われるし、学生YMCAと教会の青年会との区別もあまりなかったように思われます。

このようにして大学で教えていた宣教師の影響で学生YMCAが全国に広まっていきました。当時、キリスト教活動は、主として青年層に受容されていきました。明治二〇年代、キリスト教を受け入れたのは、青年層でありました。極めて学生YMCAの影響が強かったであろうと思われる。その当時は、鎖国状態がとかれ、明治維新によってかつての武士層は生活を支える経済的社会的基盤、価値体系を失っていました。また一般庶民にとっても同じことであり、今までの価値観が崩れてしまい、特に共同体感覚、市町村とか町とか地域の共同体が崩れていった時代でもありました。武士層は、新しい生き方を求めて、若い世代は共同体の宗教、地域の宗教とか家の宗教ではなく、個人の宗教としてのキリスト教を受け入れました。そして、未来をもたらせる宗教として多くの武士層がキリスト者になっていきました。

しかし、明治初期に人々の関心をひきつけたキリスト教

も、明治二〇年代から、関西学院が開かれる頃からではありますが、宣教が少し難しくなってきました。というのは、地方自治体が崩れていったため、逆に天皇制を用いて、いわゆる地域共同体とか家族の結束を強めようとする傾向が日本の政府の中で高まっていきました。ですから、実際には地域共同体の結束は強まり、農村部の教会伝道は難しくなっていました。そして教会に残ったといえますがキリスト教に関心を持った人たちは、都市部に住む、特にインテリサラリーマン層といわれる、地方から出てきて昔の共同体から離脱して個人的な生活を歩み始めた人たちでした。また大学で教育を受けた学生であるとか、大学を卒業したサラリーマン層が、キリスト教へと傾いていった時代であります。

その青年層にキリスト教を伝えたのが、各大学で組織されていた学生YMCAでありました。新しい共同体として組織されて、欧米の文化との具体的なつながりの場であり、非常に魅力的な場所であったらうと思われれます。

3、WSCF (World Student Christian Federation : 世界学生キリスト教連盟)

その学生YMCAが日本の中で各大学に広まり始めた頃、一八九五(明治二八)年にWSCF (World Student Christian Federation : 世界学生キリスト教連盟) がスウェーデンでたち上がります。この団体は、キリスト教に属する学生たちの連帯を求めて伝道すること、大学の中でキリスト教を証することを目的として設立されました。その主要な働きをしたのが、J・R・モットー (John Raleigh Mott, 1865-1955) という人であります。この人が後に日本に來まして、YMCAにも学生YMCAにも非常に大きな影響を与える人になるわけです。

学生YMCAに全世界組織というものはなかったのですが、WSCFというキリスト教学生の世界団体ができたわけですから、そのWSCFが基督教青年会・学生YMCAを加えていくといえますか、連帯していく形でWSCFとYMCAとが徐々に近づいてくるわけです。少しこみいった歴史の話になりましたが、そうして全国的な学生YMCAが組織されていきました。学生YMCAは、各大学で行われていた活動であって、最初は全国的には組織された団

体ではありません。色々な記録を見ても、学生YMCAはYMCAに所属するというよりも、それぞれの学生YMCAがWSCFに加盟していった、WSCFの下で連帯を強めていったという傾向が見られます。

4、関西学院基督教青年会

次に、いよいよ関西学院基督教青年会のことをお話します。関西学院基督教青年会については『百年史』にも書かれていますし、『関西学院事典』にも取り上げられています。資料としては、『関西学院青年会記録』というものがああり、一八八九(明治二二)年の開設時からの記録が克明に書かれています。ただ、一九一五(大正四)年くらいまでしか残っておりませんが、その後どうだったのかはよくわかりませんという事です。

(ア) 『関西学院基督教青年会記録』より

一八八九(明治二二)年九月に関西学院が設立され、その二ヶ月後の十一月に、神学部生を中心として、関西学院青年会が設立されます。その中にはW・R・ランバス先生とかN・W・アットレー先生とかJ・C・C・ニュートン

関西学院とYMCA

先生、中村平三郎氏、菱沼平治氏とか鶴崎熊吉氏などの教職員なども加わっていました。

それ以前に、一八八九（明治二二）年、同志社大学において学生YMCAの第一回夏季学校がすでに開催されました。全国的にも学校の基督教青年会が組織され始めた時です。といいますが七、八校でしたが、関西学院基督教青年会も、まずは大阪基督教青年同盟会に入っており、その後WSCFに連なるものになります。

一八九六（明治二九）年にJ・R・モットー氏が、関西学院を訪れます。驚くべきことは、WSCFが一八九五（明治二八）年にスウェーデンで設立された後、モットー氏はそこからすぐに全国を回り始め、一八九五（明治二八）年はニューヨーク、その後各国を訪問し、一八九六（明治二九）年には日本で活動を始めたことです。そして、関西学院基督教青年会はモットー氏の影響を受けてWSCFに入っていました。

この当時、明治二二年〜二五年の頃関西学院基督教青年会は何をしていたのかといいますと、おもに演説会とその内容に関する討論会でした。英語演説なども行われていました。例えば「岐阜震災実況」とか「青年会志士に訴える」「失敗は成功のもと」など色々面白いテーマがあり、時事的な

ものもあれば所感的なものもあります。

演説会をするというのは、明治以前の日本にはなかったことでした。そのころは、今私が話していますように、ひとりの人が前に立って全員が黙って聞いているというようなコミュニケーション手段というものはあまりありませんでした。仏教のお坊さんも説法というのをしていたではないかといわれますが、仏教の説法とか説教というのは、独特の文化をもっていました。落語の前身のようなものでした。落語では、何度同じ話を聞いても面白い。そして同じ話を聞いた時に、タイミング良く合の手を入れる場面もあり、説教に対する応答がありながら説教がなされていた。

それが、文明開化といいますが明治期になって、誰かが前に立って一方的に話すというコミュニケーション手段というものが欧米から取り入れられたわけです。福澤諭吉の『学問のすゝめ』の中にこう書かれております。「演説とは英語にてスピーチと言ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思うところを人に伝うるの法なり。我国には古よりその法あるを聞かず、寺院の説法などは先ずこの類なるべし」。江戸時代の説法とスピーチとは違うということです。それで、慶応義塾では、まず演説館を建て、演説という

ものを教えるわけです。今でいうと、コンピュータを用いてプレゼンテーションすることを教えるみたいなものです。ですから、関西学院基督教青年会は演説を一日に六本ぐらいしながら、新しいコミュニケーション能力を身につけ、当時のアカデミックな面で、先進的な活動を展開していったと思われます。同時に礼拝や祈りというのが重んじられて、基督教青年会としての特質であるアカデミックであり信仰を持つということが、兼ね備えられた活動であったと思います。

(イ) 一八九七年一月 W S C F 日本学生青年会大会 ウエ

ンライト氏 参加

一八九六(明治二九)年にJ・R・モットー氏が関西学院にW S C Fの入会を勧めるために訪問しました。一八九七(明治三〇)年にはW S C Fの日本学生青年会大会が開かれました。一八九七年には学生Y M C Aは全国で八校ぐらいしかないなか、関西学院は非常に大きな存在であったと思います。そしてモットー氏が帰国する頃には加盟校が三八まで増えていますから、モットー氏は非常に精力的に各大学を回って基督教青年会を作っていたと思います。そこで先程の基督教青年会記録をみますと、

一八九六(明治二九)年にモットー氏が訪れた時に、S・H・ウェンライト(Samuel Hayman Wainright)先生を青年会の委員として送ってほしいということを求めました。その要請を受けて、ウェンライト氏がW S C Fの第一回の全国青年会大会に呼ばれていくわけですが、日本委員は、青年会の選挙によって蘆田慶治氏がそれに選ばれたと書かれています。その次に明治三〇年一月に全国大会があるわけですが、「代表委員ウェンライト氏之に赴き委員蘆田氏之に赴かず」と書かれています。欠席したわけです。何故かなどと思います。その後「青年会役員責任問題起り総会議を開く委員蘆田氏その過失を謝罪し且つその過失を来せし由来を陳情す」とあります。「日野原善輔氏(日野原重明氏の父)は非常の勢いを以って蘆田氏排斥論を発す」と書かれていますから、何か非常に大変なことがあったために行くことができなかったのだらうと思われれます。

蘆田氏がどのような方でどのような役割を果たしたのかはわかりませんが、もしW S C Fの全国大会に行っていたのならもう少し関西学院とW S C Fとの関係も強くなっていたのではないかと思われれますし、その後、日本からも全国W S C Fの大会にも参加していますから、関西学院から第一人目として送ることができたかもわかりません。

(ウ) 会則(目的)・役員の変遷

一八八九(明治二二)年の時は、会長、副会長、書記、祈祷会委員というのがありました。祈祷会委員とは、祈祷会を運営する重要な役割で、神学生などが、担当していたのではないかと思われます。一八九二(明治二五)年になりますと、「会則」の中には目的として「本会は、キリスト教を主義とし宗教および学術の談論講究または社会矯風の運動をなし、あわせて体育を奨励するにあり」と書かれています。しかし、一八九二年には祈祷会委員がなくなっており、幹事長がその役を行うと書かれています。

一八九八(明治三一)年になると「会則」が「憲法」と言い表されています。そこには、「会員相互の生活を高尚ならしめ、ならびに学生をしてキリストを唯一の救い主として信奉せしむること。社会に福音的事業を拡張すること」と書かれており、どちらかというと徐々に社会的な運動、社会的な関心というものが強まっていったようです。

一九〇九(明治四二)年には、また「会則」にもどります。「本会の目的はキリスト教主義のもとに靈的修養を強め学生生活を高尚ならしむるにあり」と少し短くなっており、ここで、会長、会計、書記とあり、そのもとに宗教部、文学部、社交部、図書部と分かれていました。その宗教部

が、特別にひとつの団体として置かれています。文学部の方が主になっていったのではないかということが、会を開いている回数とか内容からわかります。社交部というのは何かというと、新人歓迎会を企画する、現在でいうとコンパ係りであったのかと思われます。

これを見ますと、少しずつキリスト教活動が少なくなっています、基本的には活動していますが前面には出てこなくて、宗教部という形になり、基督教青年会の全体の活動ではなく一部門となっていったことが推測されます。

(エ) 基督教青年会とキリスト教

その頃から根本的にYMCAが持っていた問題として、新神学問題とSCM (Student Christian Movement) か SCM (Social Christian Movement) かという問題があります。これについて少しだけ述べさせていただきます。

先程も申しましたようにYMCAというのは、信徒運動でしかも大学の中でその活動を行っていたわけですから、そこにはクリスチャンでない人も集っています。教会的な、いわゆる教会形成とか、伝道を行うというものから少し離れて自由にキリスト教のことを話したり考えたりするところがあります。その雰囲気合致したのがドイツから

伝わってきた新神学、アメリカから来たユニテリアンという運動でありました。これについて今日は詳しく述べませんが、基本的にはキリスト教というものを非常に理性的に合理的に理解するというものです。これまでは、宣教師たちは本当に純粋な教會的信仰をもって、関西学院をつくったり、基督教青年会をつくっていました。しかし、徐々に大学生のレベルが高まってきたり、アカデミックな関心が高まってくると、単純に信じろとか、これが神だからとか、イエスだから正しいというのではなく、哲学的あるいは社会学的に、思想的に何を意味しているのかということを学問的に追求する関心というものが強まってきました。そして少しずつ学生YMCAにおいて、大学で読む聖書の読み方と教會で読む聖書の読み方との違いというものが出てくるわけです。

さらに問題になるのがSCM(学生キリスト教運動)かSCM(社会的キリスト教運動)かということですが、学生YMCAでは教會に縛られないでキリスト教に出会ってきます。関西学院でもそうであったと思いますが、教會という組織の中に収まるキリスト教ではなくて、キリスト教が社会とどういうふうにつながってくるのかということ、それが絶えず問われてきます。その当時世界的にもといいます

か、アメリカ等を中心として、信仰が個人的な問題にとどまるのではなくて、社会とどう関わるのかということに関心が高まってきた時期でもありました。賛美歌の中で「ナルドの壺ならねど……」(『讚美歌』391番)という歌があります。この賛美歌のメロディーは情緒的ですが、内容は社会的です。というのは、ナルドという香油をイエスに捧げた女性がいました。それに対して私たちは一体何をもって社会に仕えていくのかということを問う歌で、非常に社会的な内容です。メロディー的には優しい旋律なので、福音的なものを感じますが、詩の内容は非常に社会的です。そういうものがキリスト教の動きの中にあり、その影響を受けて、SCM(Social Christian Movement)というのが起こってきます。これについて詳しくは、キリスト教主義教育の一八号に井田昭子さんが、「中島重と関西学院―SCMと社会的キリスト教運動をめぐって―」という論文を書かれています。中島重先生(1888-1946、1929年に関学に就任)は文学部の教授でした。この論文は、とてもおもしろくて、YMCAというか、さきほどのSCMとの関係についても書かれています。中島先生は、非常に社会的キリスト教に傾倒されて、現在の宗教総部の前身であるSCMに社会的キリスト教運動を持ち込もうとしたのです。けれども関西

関西学院とYMCA

学院では根付きませんでした。井田氏は「中島の思想はSCMに関しては何関西学院をかすめて素通りしてしまつた」と大変おもしろい表現で書いています。また、「社会的基督教はどうかというと、その後の関西学院において受容された形跡はほとんどない」と書かれており、関西学院には社会的な関心はあまりなかったことがうかがえます。

5、学生YMCAからSCA (Student Christian Association)・宗教総部へ

伝道的キリスト教か社会的キリスト教か、という議論は、一九三三年に一つの山場を迎え、第四二回学生YMCAの夏期学校において、社会的キリスト教をもとめる学生が学生YMCAを離れていく結果となりました。軍国主義が高まる中で、学生YMCAはむしろ福音派的な伝道的キリスト教へと重点が移り、社会的な問題から離れていくこととなりました。

第二次世界大戦後、一九五二(昭和二七)年に関西学院の基督教青年会はSCAという名前に変わります。日本語名としては今の宗教総部という名前に改称されて、学院の宗活(宗教活動委員会)の構成メンバーであったようです。

大学生も宗活のメンバーですから、宗活からの費用で夏季キャンプを行っていました。

一九五七(昭和三二)年、SCAは宗活から独立してひとつの学生団体として、キャンプリーダー、長島ワークキャンプ、キリスト者反戦運動、献血運動などを行ってきました。学生YMCAをSCAと改称する傾向は、他の大学でも見られました。例えば青山学院、同志社大学もSCAと名乗っています。このSCAがいわゆる学生YMCAやWSCFとのつながりをもっていました。色々な記録に、関西学院の代表が学生YMCAやWSCFの集会に出てきたという記述が見られます。『関西学院事典』にも書いてあるのですが、SCAがどういう活動であったかというところ、「聖書や基督教思想の研究活動に傾斜する動きを見せつつも」という表現があります。つまり、伝道とかキリスト教の啓発活動としての学生YMCAとキリスト教精神に基づいて行われる学内奉仕、もしくは社会的な活動としての学生YMCAへと二極化していきます。キリスト教というものを広めようとか聖書研究したいというグループと、キリスト教精神に基づいて奉仕をしたり社会に関わりたいうグループに分かれてくるのです。

6、学生YMCAと社会運動

一九五五（昭和三〇）年までは、いわゆる戦後のキリスト教ブームの時期でありますので、学内においても盛んに伝道活動が行われておりました。その一方で、学生YMCAがキリスト教の伝道団体ではなくて、一般の学生の活動なのだという意識の中で、伝道活動や聖書研究会活動を偏重する動きに対する批判も起こってきました。例えば青山学院の中でも聖書研究をしているグループ、いわゆる聖書の勉強ばかりしているグループに対して批判が起こり、社会的奉仕や具体的な社会活動、「筑豊の子供を守る会」などの活動が活発になっていきます。そして、社会問題へ取り組むということが徐々に鮮明になっていきました。

その背景には、一九四八（昭和二三）年の福井大震災とか、一九五三（昭和二八）年の熊本の大水害とか、一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風の自然災害の復興が社会的にも尊重され、関西学院からもたくさんの方がボランティア活動に行つたようです。このような具体的なボランティア活動に重点がおかれていきます。

一九六〇年代に入ると、日米安保条約の改正に対する反対運動が高まって、学生YMCAの学生たちも安保反対運

動に参加していきました。こういう傾向を見るならば、学生たちの社会に対する関心は高まり、いかに社会に参加するかということが問題になっていき、従来の教会的学生YMCA活動に対する限界と疑問を持つ学生が増えてきたことがうかがえます。

一九六〇年代から七〇年代の学生紛争を経験して、教会から青年たちが去っていきました。その状況と呼応して、伝道的キリスト教と社会的キリスト教の二極化が鮮明になり、先程出てきましたK GKという聖書の学びと伝道を中心とする福音派の団体が日本の大学の中に生まれていきます。

この二極化によって学生YMCAの活動がより明確になり、社会活動に集中したわけではなく、むしろ全体的に分裂・弱体化していきました。一九六八（昭和四三）年には、学生YMCAの全国学生委員会が解体して、日本YMCAの学生部が正式に解散いたします。

関西学院大学では一九六八（昭和四三）年に、大学紛争でSCAの活動は休止します。一九六九（昭和四四）年にSCAが廃止されることによって、関西学院大学はYMCAとの関係を失っていくこととなります。創立以来の基督教青年会が終わるといふこととなります。WSCFとの関

関西学院とYMCA

係もなくなつてしまいました。

一九七〇（昭和四五）年以降、これまで活動していた奉仕部、千刈リーダーズクラブ、聖書研究会が再開されて、宗教総部としての活動が始まり、現在に至っているというのが現状であります。

7、学生YMCAの再興

一九七〇年代に学生YMCA運動が低迷するのですが、一九八〇年代に入って、かつての学生YMCAであったシニアによって、学生YMCA再生の動きが始められます。一九八〇年代から日本YMCAは離散していたYMCAのシニアを掘り起こして全国に拠点作りを始めていきました。ちょうどその時期、一九八〇（昭和五五）年に関西学院大学では神学部の高谷宣史先生の呼びかけによって、関西学院大学学生YMCAが非公認団体でありましたが、組織されて読書会を中心に始められました。私もそのメンバーでした。毎年機関紙を発行して、全国の学生YMCAの活動とか関西地区の学生YMCAの集会にも積極的に参加して、機関紙も四号まで発行いたしました。メンバーであった学生も積極的に投稿し、結構しつかりとしたものでした。

しかし、時代が違ってきたのでしょうか、学生YMCAの活動が続かず、数年後には自然消滅してしまいます。これは学院史の問題でもなんでもないので、教員がだんだん忙しくなり、学生と共に活動にかかわることができなくなると集る場所もないため、集ろうという気がなくなってくるのです。その頃から、全国的に、バブル景気の中でテニスとかスキーなどの同好会への関心が高まってきて、関西学院でもテニスとか季節ごとに活動内容が変わる同好会が増えてきました。社会問題よりもブランドとかレジャーへの関心が高まり、個人主義が強まってきました。全国的に見ても一時期復興したかのように思えた学生YMCAだったのですが、やはり一九九〇（平成二）年以降学生YMCAに参加する学生数が徐々に減少しています。例えば、神戸大学のYMCAには今はもう誰もいません。資金はあつて活動する部屋もあつて支援するシニアはいるのですが、学生が集らない。そしてまず世話してくれる先生がない。広島大学もそうです。大阪大学もそうです。あと学生YMCAというのは寮（京都大学・地塩寮など）を通して、活動していたのですが、どうしても学生YMCAとしての活動は少なくなりました。毎年夏に御殿場のYMCA東山荘で夏季ゼミというのが行われています。私が学

生時代に参加した時には一〇〇名を超える人たちがいましたが、現在は二、三〇名の出席者です。

関西学院では二〇〇一（平成一三）年になって、数名の学生が是非やりたいというので、YMCAが再開をいたしました。現在関西学院大学YMCAというのは非公認ですが、全国の夏季ゼミに参加をしたり、インド・スタディキャンプとか、日韓学生YMCA交流プログラムとか、WSCFの交流プログラムとか、ジェンダーについて考えるグループなどの全国組織にも参加しています。

おわりに

長々とお話して申し訳ありませんが、終わりに、このように調べてきまして、どうにか学生YMCAというのが再興しないのかと思うところですが、ひとつの意見として聞いていただきたいのですが、宗教総部というのが内向きの活動であり、もう少し外向きの活動を展開してもいいのではないだろうかと思いました。学生YMCAのつながりの中にあると、WSCFや全国のYMCAとの関係ができて、上ヶ原から日本へ、日本から世界へとつながっていくというネットワークの可能性を持つことができます。しか

し、現状であるならば、ここで完結してしまっている寂しさというものを感じなくはありません。ワークキャンプやキャンプリーダーとか、色々経験を持っています。しかし、その経験から得た知識や知恵を基盤として、できたらもう一度関西学院大学の宗教総部が、WCFとの関係を持ち、世界のキリスト教青年たちの出会いのなかで位置づけられるような団体になればいいのになと思いました。創立とともに始められた活動が、何らかの形で続けていくことができればいいと思った次第です。

〈参考文献〉

- 関西学院キリスト教主義教育研究室編 『関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ 関西学院青年会記録』、一九七六年
- 関西学院キリスト教主義教育研究室編 『関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ 関西学院青年会記録』、一九八〇年
- 奈良常五郎著 『日本YMCA史』、日本YMCA同盟、一九五九年
- YMCA史学会編集委員会編 『新編日本YMCA史』、日本YMCA同盟、二〇〇三年
- 京都大学キリスト教青年会百周年記念事業委員会記念誌部会編 『地塩洛水 京都大学YMCA百年史』、京都大学キリスト教青年会、二〇〇三年

関西学院とYMCA

一橋基督教青年会編 『一橋基督教青年会―百年史―』、

一九八七年

立教大学キリスト教青年会 『交わり 伝道 ボランティア

創立一一五年記念誌』、二〇〇六年

SCA 21世紀の会編 『青山学院大学SCAの歩み』、二〇〇四年